

さあ来い！

本間 雅晴



本間雅晴中將は悲劇の將軍といわれます。身長は一八〇センチメートル強で堂々たる体格と洗練された教養、日本陸軍きつての英米通であり人道主義者でした。フィリピン進攻作戦の失敗で予備役に編入され、戦後、「バターン死の行進」という部下の行為で捕虜虐待ほりよぎやくたいの責任を問われ、マニラで銃殺刑となりました。

開戦当初の本間の作戦は順調でしたが、首都マニラ占領を優先せよという、大本營の指示に従ったため、バターン半島に逃走した米軍への攻撃が遅れ、それが本間の失策とされました。

米軍の司令官だったマッカーサーは日本軍に追い詰められ、コレヒドール島の

要塞ようざいからオーストラリアへ脱出だつしゅつしますが、誇り高い彼が敗戦の屈辱くつじやくを受け、その報復として行われたのが本間への処刑でもありました。

本間は明治二十年（一八八七年）新潟県佐渡さどの農家の生まれ、佐渡中学を経て陸軍士官学校を出て、大正四年陸軍大学校を最優秀の成績で卒業。イギリスなど外国駐在が長く、語学力は抜群で、文弱ぶんじやくの徒ととも評されました。

バターン占領後、予想をはるかに上回うわまわる大量の捕虜が投降、輸送力がなく収容所まで歩かせたのですが、すでにマラリヤなどに冒おかされていた捕虜は、食料不足と炎熱のため、一万余名が衰弱すいじやく死したのが実態でした。

本間の裁判には、富士子夫人が証人として出廷「私は今もなお本間雅晴の妻であることを誇りに思っております。私は夫、本間に感謝しています。娘も本間のような男に嫁とつがせたいと思っております。息子には、日本の忠臣であるお父さんのような人になれと教えます。私が、本間に関して証言することは、ただそれだけです」と述べ、裁判官も検事も感動の涙を浮かべました。

銃殺されるとき立ち会った、通訳の上脇辰則らの証言によれば、死刑執行官の「用意！」の声に続いて、「さあ来い！」という気迫のこもった、本間の最期さいごの声を聞いたとのことです。

※本間 雅晴（ほんま まさはる・昭和二十一年～一九四六年）刑死・五十九歳

◎ 本間雅晴の裁判での富士子夫人の「娘を本間のような男に嫁がせたい」との証言に涙しました。

◎ 本間の最後の声「さあ来い！」に武人の靈魂れいこんを感じました。

(M生)